

氏名 くに しげ とおる 重 徹 教授



主な研究テーマ

英語多読導入のBefore and After

平成26年度の研究内容とその成果

平成26年度の研究では、英語の授業に多読や多聴を導入することで、学習者の英語学習や英語という言葉そのものに対するモチベーションや情意面がどのように変化するかをアンケート調査や聞き取り調査によって明らかにした。

現在本学の英語の授業は入学時に実施するCASECという英語のプレイスメントテストの結果に基づき、レベル別のクラス編成になっている。平成26年度はレベル別でもっともやさしいレベルのクラス（基礎レベル）及びもっとも高いレベルのクラス（中級レベル）を担当した。平成26年度は特に、基礎レベルクラスの最初と最後に英語に対するイメージや苦手意識、英語学習に対するモチベーション等についてアンケートや聞き取り調査を行った。また、非常勤講師を担当している鹿屋市立鹿屋看護専門学校においても、同様の調査を行った。

その結果、最初のアンケートで基礎レベルの学生も鹿屋市立鹿屋看護専門学校の学生もその9割以上が英語に対して苦手意識を持っていることや、科目としての英語が

嫌いだったという結果が出た。

しかし、半期ほど多読や多聴の授業を受けた後に同様のアンケートを行った結果、基礎クラスの学生も鹿屋市立鹿屋看護専門学校の学生も英語に対する苦手意識や、英語が嫌いという学生のパーセンテージが約3分の1にまで減った。

半期の多読・多聴の授業を受けた感想を自由に記述させるアンケートの質問項目に対する回答や、個々の学生に対する聞き取り調査からも、「多読・多聴により、やさしい英語を読めるようになった」、「このような英語の勉強の仕方があったのかと驚いた。初めて英語の本を読み切ることができてとてもうれしかった」、「多読・多聴の授業のおかげで英語の本を読むことが好きになったので、授業は終わるけれども、今後もしもやさしい英語の本を読み続けていきたい」など、大変英語や英語学習に対して肯定的な感想を得ることができた。

これらは、多読用図書にさまざまなレベル（ごくやさしいものからレベルの高いものまで）のものが揃っていることや、ストーリーの内容が学習者にとって面白かつ



たり、タメになったりする機会が多いことなどがその理由だと考えられる。

これからの研究の展望

英語の多読・多聴により、英語が苦手な学習者のモチベーションをある程度は上げることや、英語に対する苦手意識を軽減させることができることは分かったが、相変わらず苦手意識を持ったままの学生もまだ約3割はいる。

そこで、そのような英語が苦手なままの学習者について、多読をする際に、どのような点に引っかかった（つまづいた）のかという点や特に苦手意識の強い学習者にとって最も効果的な多読・多聴学習法はいかなるものなのかという点等を明らかにすることを目的として研究を継続していきたい。